冴子の世界

北川　清仁

冴子の世界はちょうど半日ほどもあれば
路地の隅々まで歩けるような街ぐらいの大きさで
しかも　いつも夏だ

それは　なせかといえば
冴子が麦藁帽子かぶって歩いており
また　どこからか蟬の声が聞こえるからだ

夏の日の冴子は　屈託がなく
子供のように僕の手をはなさない

しかし　冴子の世界は
ほんとうはもっと大きくて
見えない冷たい野がどこまでも広がっている

冴子がときどき　目を細め
遠くを訝るようなしぐさをするのは
その野の上を大きな雲が流れ
野が翳るからしい

冴子はたまにその野にはいっていってしまう

そんなとき僕はひとり夕闇にとり残されて
冴子が帰ってくるのをじっと待つのだ